

第 15 回 歴史リレー講座「天智天皇の高安城と王寺」 菅谷文則氏 (H27.12.20)

今回は、天智天皇が築いた高安城と王寺の関係についてのお話です。20 数年前までは高安城は幻の存在で、「生駒山の大阪側にあった」と推測されていました。八尾市の地名「高安」にひきずられたのでしょうか。研究者たちは城跡を求めて生駒山の西側斜面の麓を丹念に調査しますが、収穫はありません。そこで視点を変えて生駒山の奈良県側にまで足を延ばした結果、とうとう平群町のあたりで食糧や武器の倉庫跡を発見されたのです。しかしながら、肝腎要の大本営は王寺にあったのではないかと私は考えています。

その裏付けには 1932 年（昭和 7 年）の大規模な地すべりで有名な「亀の瀬」が大きなカギとなります。衛星地図を眺めると、奈良盆地の水はすべて大和川に流れ、大阪府と奈良県の境にある亀の瀬経由で石川と合流した後、大阪湾へと向かうことが確認できます。古来、亀の瀬は水路から陸路を経て再び水路へと海外物資を積み換える港、すなわち交通の要衝でした。

『日本書紀』には、663 年に朝鮮半島で起こった白村江の戦いで、倭国・百済連合軍（実は百済は滅びていたため、一種の百済ゲリラであった）は唐・新羅の連合軍に大敗。翌年、敵の襲来を防ぐために対馬や吉岐に駐屯地や狼煙台、水城（敵の侵入を防ぐ人工的な湖）を造った天智天皇は、667 年に倭国に高安城を築いたとあります。

現在の大阪市中央区難波のあたりは当時は港でした。敵軍が瀬戸内海を経て大阪湾から大和川を遡り、大和盆地に攻め入ってくることは容易に想定されたでしょう。瀬戸内海をはさんだ西日本全域が臨戦態勢という時代、高安城はその最後の砦でした。

さて、物資の運搬ですが、亀の瀬を境に大和川上流は水量が減り川底が浅くなるため、江戸時代は剣先船から喫水線の浅い魚梁船（やなぶね）に積み換えられていました。その中心地が現在の王寺町あたり。意外に思われるかもしれませんが、明治 30 年代まで王寺は港町として隆盛を極めていました。同時代、大和盆地が木綿の一大産地として発展できたのも、北海道から北前船で日本海を下り、下関、瀬戸内海、大阪湾を経て亀の瀬から魚梁船で運ばれてきたニシンかすなどの肥料のおかげなのです。

亀の瀬では、いわゆる沖仲仕（おきなかし）と呼ばれる若い男性労働者がひしめいていました。到着した物資を降ろし、陸路を歩いて魚梁船や剣先船に積み込む重労働をこなす彼らにとって、食料や衣服、宿泊施設などが近場で調達できれば好都合です。また、港は今で言う国境地帯なので、中世では税金や通行料の取り立ても行われました。自然と上流に大きな町（王寺）が栄え、そこから亀の瀬まで彼らは毎日「通勤」したのです。明治 25 年、この物資輸送の大動脈に現在の関西本線が敷設されたのも当然といえましょう。

明治時代の記録によると、亀の瀬での積み換え後、魚梁船が向かった最も奥深い土地は桜井の三輪あたり。隋からの使者も亀の瀬経由で三輪の海石榴市（つばいち）に案内され、大歓迎を受けました。現在もとぎれとぎれに残る太子道（飛鳥岡本宮と斑鳩を斜めに結ぶ道）をとってみても、王寺と斑鳩の地こそが海外文化を受け入れる日本の玄関口だったと考えられます。

王寺周辺の文化財についても触れておきましょう。平成 26 年、本格的な発掘調査が行われた王寺町の舟戸神社西安寺跡、久度神社、県内では数少ない禅宗寺院の達磨寺、そこから葛城市へ抜ける一帯は尼寺廃寺や當麻寺など飛鳥時代後期（白鳳時代）の貴重な文化財が残る「白鳳寺院ロード」です。

このように、城に必要な物資の貯蔵という目的や歴史的・文化的背景からみても高安城は亀の瀬上流あたりになければ不都合です。しかも、兵士が駐屯していたのは平群から三郷あたりでしたが、戦いの総指揮を執る大本営は水陸交通の要衝、王寺だったのではないのでしょうか。

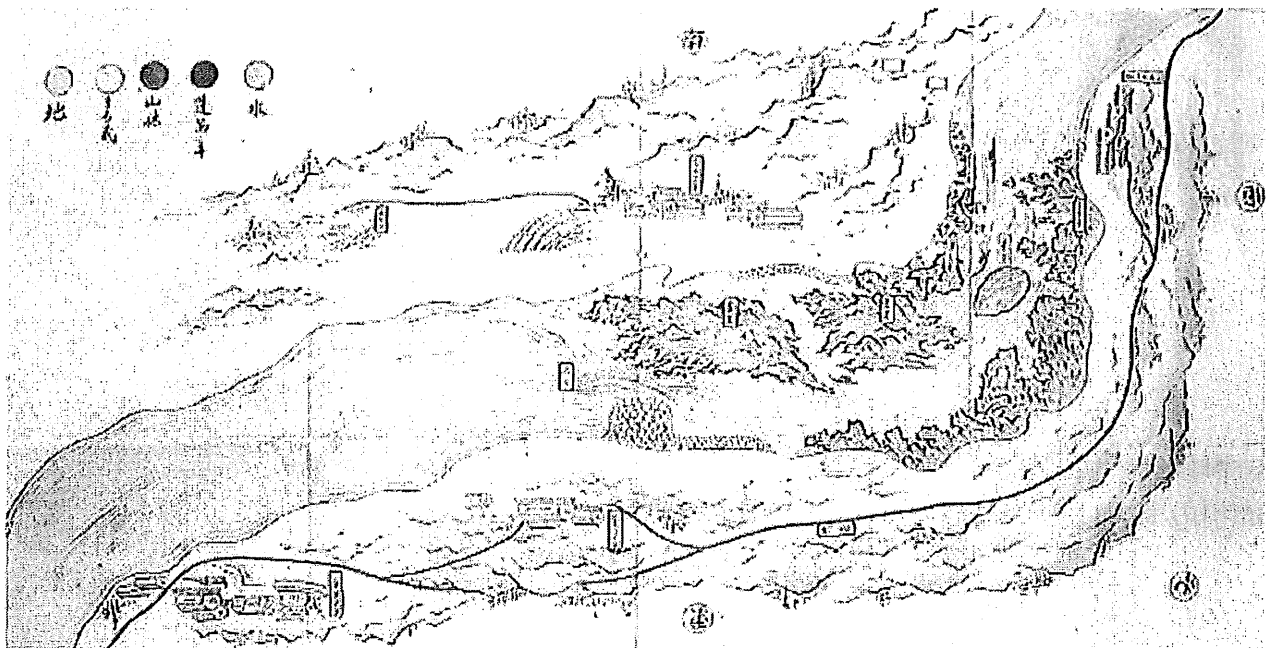
現代でこそ「鉄道のまち」として知られる王寺ですが、昔は名だたる港町でした。さらには高安城の大本

営はここにあったのではないか、このことはもっと世に問われてもいいと思います。

歴史リレー講座「大和の古都はじめ」第15回

天智天皇の高安城と王寺

菅谷 文則



亀の瀬の間屋場(江戸時代)



図6 王寺町の古代史跡

王寺町は、古代は“大和国葛下郡”の一部であった（斑鳩町は“平群郡”であった）。大和川の大蛇行までが葛下郡であり、より古い時代は葛城であった。

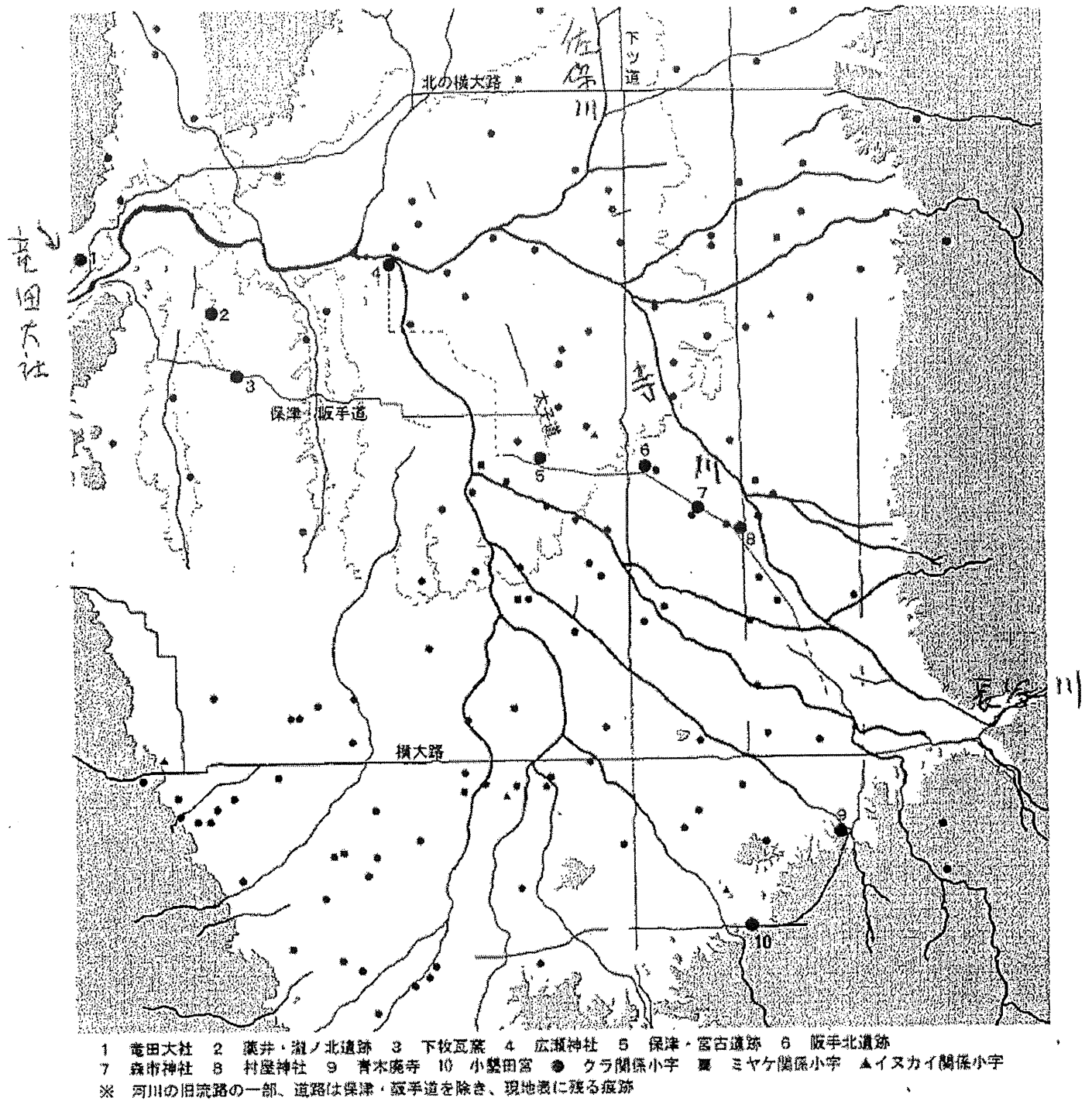
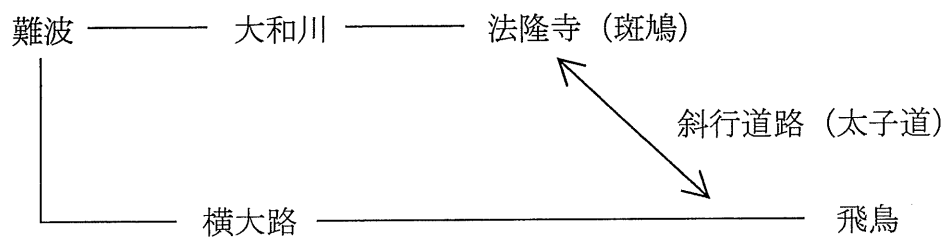


図1 奈良盆地の旧河川と地名



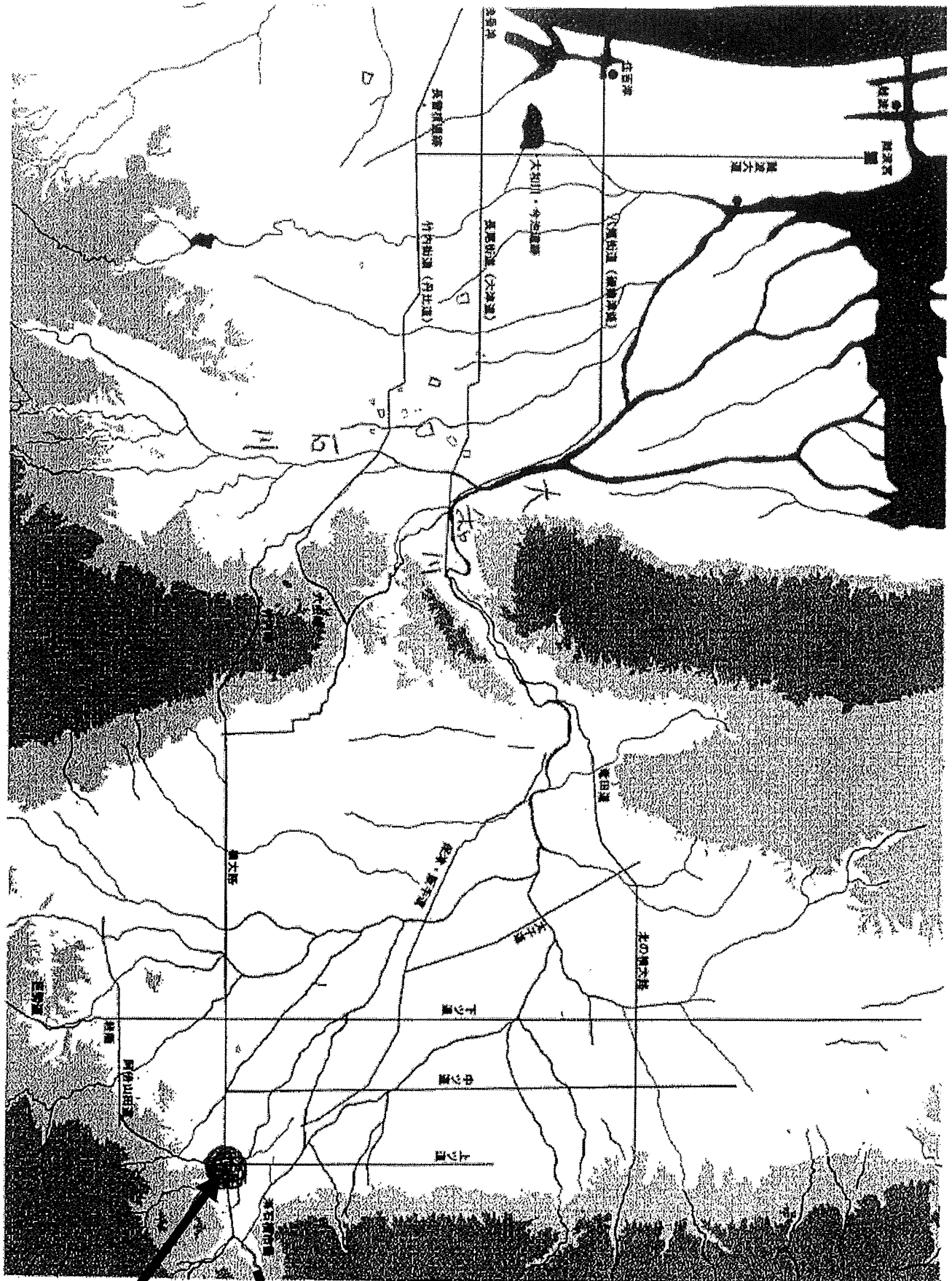


図2 大和と河内の道路網

菅谷説の海石榴市

至東海

船運も重要である。

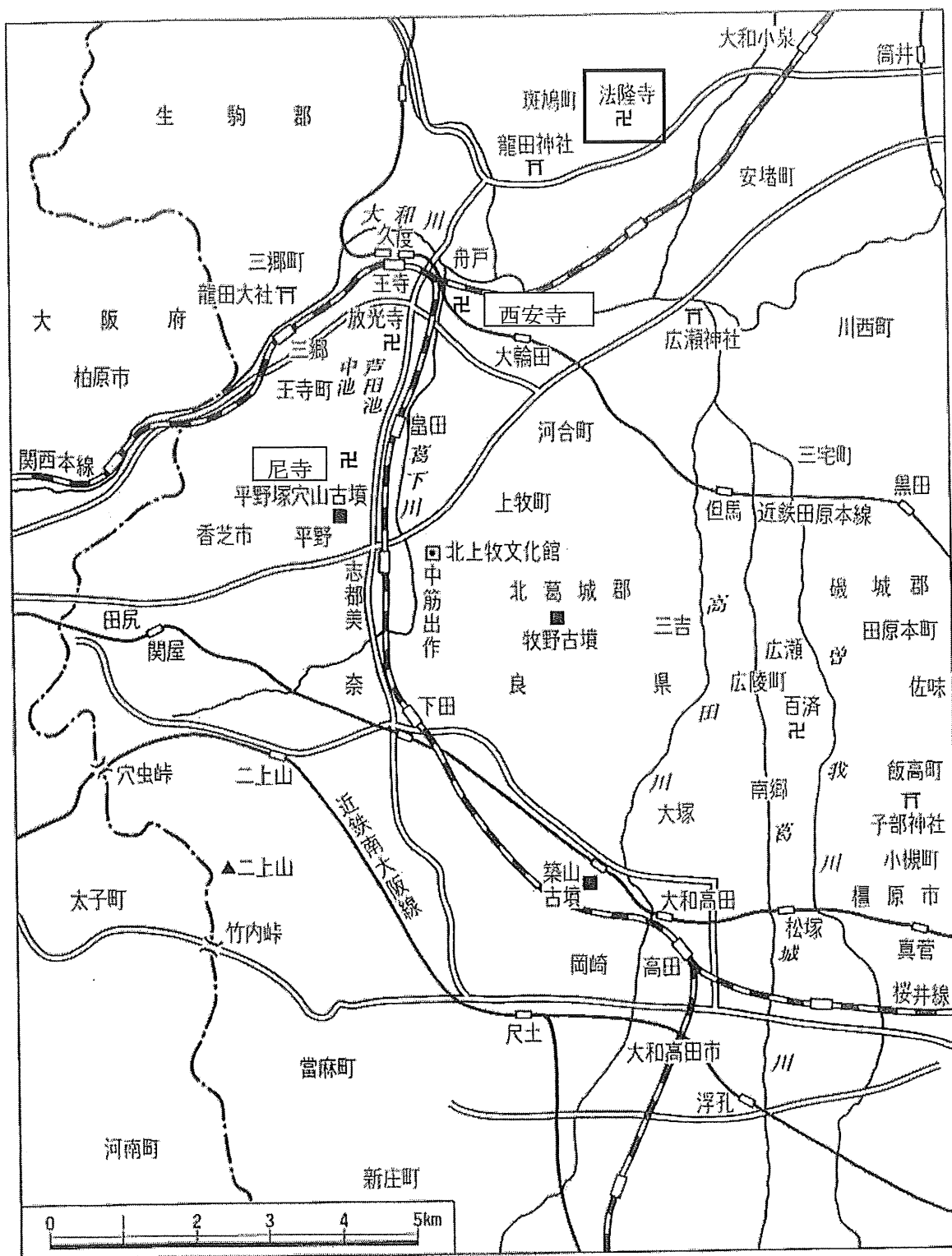


図4 “葦田宿禰系葛城氏” 関係地図

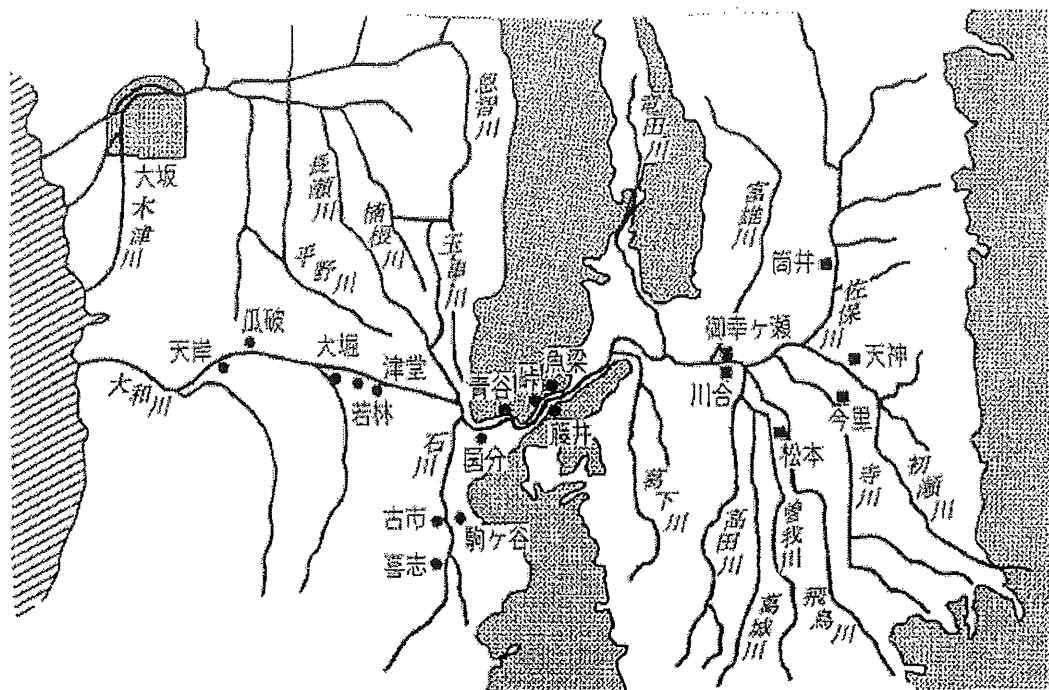
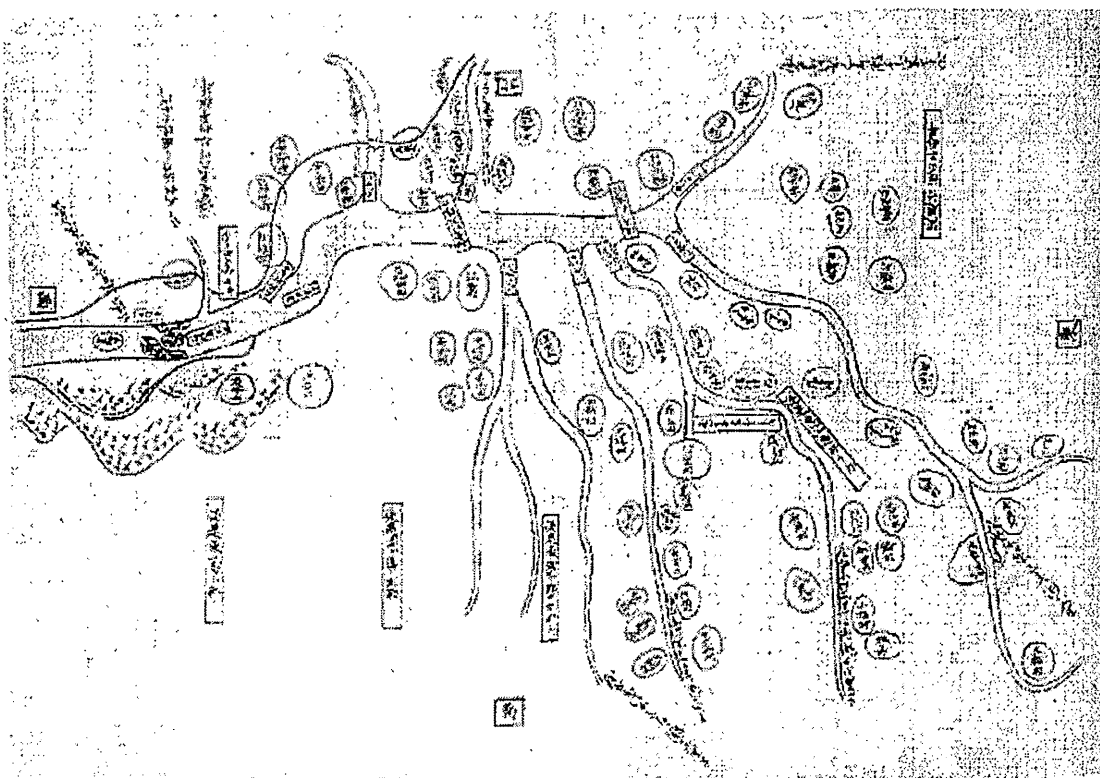


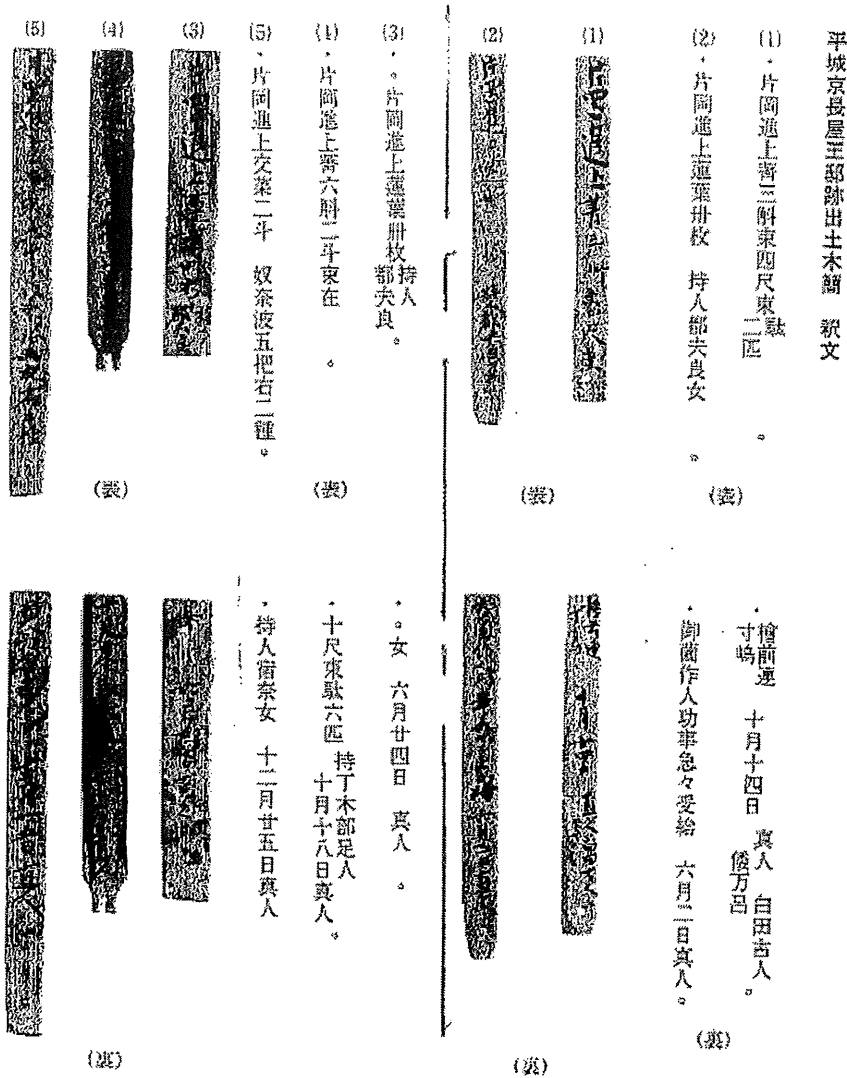
図1 大和の地勢と川の流路

(注) ■=魚梁船の荷継問屋、●=剣先船の荷継問屋
荷継問屋の場所は時期によって変動がある。



魚梁船の働場を示す絵図 (天理図書館所蔵)

野菜の産地



平城京長屋王邸跡出土木簡
(奈良国立文化財研究所許可啓)

鯛の進上 (平安時代)

歳末納帳
(平安遺文「所収」)

注進 歳末納帳事宛元々年々
合

鯛一懸 二王 十二月五日 薪一駄 山田太郎殿
南川 雜賀入道、十三日、辰市 鯛四十三日池田則行鯛一懸
十二月 藤野預備殿
十六日 廣福院歳末 八家 八家
七郎房一寄 持蘭房一
一寄 昌房一寄
安 新八束 黒田 鯛一懸
鯛一懸 免一枕 十二月十一日 片岡庄司太君 二把平菜二
合七月二日 百 十合内 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤 佐藤
アワコナ五束土佐大夫 一羽
安生寺相合菓子十合 久米鯛一懸
南川是行雜菓十合 二見之行雜紙廿帖
二見定寛紙立菓子八合 辨海小鯛 枚
御給
正 重國 宋貞 真國 是 包正 久延茂
五合
雜菓子各十合 岩友五合 林花鯛二枚
庄歳末菓子卅合内廿合 十二月廿六日十合上

天智二 (六六三) 年 唐・新羅連合軍と倭国・百濟遺民連合軍が白村江で戦い、倭国・百濟遺民連合軍が大敗。百濟遺民とともに帰国。

天智三 (六六四) 年 對馬嶋・杵岐嶋・筑紫国等に防と烽とを置く。又筑紫に水城を築く。

天智四 (六六五) 年 長門国に築城、筑紫国に大野・椽の二城を築く。

天智六 (六六七) 年 倭国に高安城、讃吉国山田郡に屋嶋城、對馬国に金田城を築く。

天智八 (六六九) 年 天皇、高安嶺に登る。高安城の工事を一時中断。高安城修理、畿内の田税を収む。

天智九 (六七〇) 年 高安城修理、穀と塩を積む。又長門城一つ、筑紫城二つを築く。

天智十 (六七二) 年 達率谷那晋首(兵法博士)らに叙位。

天武元 (六七二) 年 近江軍、高安城の税倉を焼く。三尾城を攻める。

天武四 (六七五) 年 天皇、高安嶺に登る。高安城に幸す。兵政官の創設。諸王・有位者への武器の装備を指示。

天武五 (六七六) 年 京・畿内の武器を調査。

天武八 (六七九) 年 文武官僚に対する兵器・馬の検閲を指示。竜田山、大坂山に関を置き、難波に羅城を築く。

天武一二 (六八三) 年 陣法の教習を指示。

天武一三 (六八四) 年 天武天皇の詔「政治の要は軍事である」文武官人に兵馬を整えさせる。

天武一四 (六八五) 年 軍団装備用の兵器の私藏を禁じ、郡家に収める。

持統三 (六八九) 年 筑紫に石上麻呂らを遣し、新城を視察させる。天皇、高安城に幸す。兵士は国ごとに壮丁の四分の一を指定し、武術を習わせよ。

持統九 (六九三) 年 諸国に陣法博士を派遣し、兵法を教習させる。

文武二 (六九八) 年 大宰府に大野・基肆・鞠智の三城を修理させる。高安城修理。

文武三 (六九九) 年 大宰府に三野・稻積の二城を修理させる。高安城修理。地位に応じた武装と軍備を整えるよう指示。

文武四 (七〇〇) 年 皇族・臣下や畿内に武器を装備するよう指示。筑紫総領、周防総領、吉備総領ら任命。

大宝元 (七〇二) 年 大宝律令施行。高安城廃し、貯蔵物を大和と河内に移す。衛士増員。

古代山城分布図

